

2022 年度 明星大学心理相談センター活動報告

井出尚子 明星大学心理学部 津里なおみ 明星大学心理相談センター

I はじめに

明星大学心理相談センター（以下、当センター）は、1990 年に開設された明星大学人文学部心理・教育学科（心理学専修）附設心理相談室を前身として、2001 年に大学に附設する機関として設置された。2002 年から、本学大学院人文学研究科心理学専攻（臨床心理学コース）が臨床心理士資格認定協会「第 1 種指定大学院」として認定され、当センターは地域に貢献する臨床の場、また大学院生の教育研修機関として発展してきた。

本学では、2017 年度に心理学部が人文学部から独立し、2020 年度には大学院心理学研究科心理学専攻（前身は人文学研究科心理学専攻）が発足した。また、2017 年に公認心理師法が施行されたことを受け、本学心理学部心理学科および心理学研究科心理学専攻（臨床心理学コース）では 2019 年度より公認心理師の養成カリキュラムを実施している。これに伴い、当センターは従来の臨床心理士に加え、公認心理師を養成するための臨床実習を担っている。

今年度の当センターのスタッフは、専任教員 6

名、特任教員 4 名、検査相談員 1 名、実習指導員 2 名、事務職員 4 名に加え、教育・指導を受けながら臨床実習に携わる大学院生（研修員）、大学院修了生である研究員で構成されており、相互に連携を行いながら運営している。

2022 年度も前年度に引き続き、新型コロナウイルスへの対策を続けながらの活動、運営を行った。以下に当センターにおける 2022 年度の活動の概要について報告する。

II 相談活動

1 面接形態

当センターでは、面接をその形態により分類し集計している。その分類と内容は表 1 の通りである。

原則、受理面接は特任教員が行い、心理検査は検査相談員が担当し、集団面接（主に不登校の児童生徒を受け入れているフリースペース）は教員・実習指導員の指導の下に研修員が行い、個人面接は事務職員と検査相談員以外のセンタースタッフが担当している。

表 1 面接の形態

分類名称	含まれるもの	内容
個人面接	カウンセリング（成人）	子どもの心理的、発達上の問題について子ども自身への援助や保護者への助言（親子相談）と、主に成人以降の方を対象にしたカウンセリング
	親子相談	
集団面接	フリースペース：じゃんぼ	主に小・中学生の不登校の子どもたちへの居場所の提供及び集団を通じた援助
心理検査	様々な心理検査、発達検査	

2 面接回数

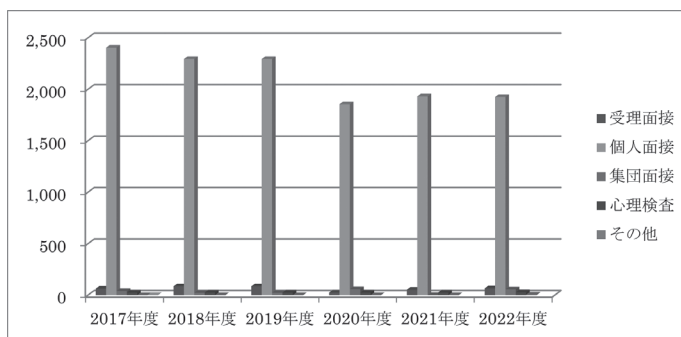
当センターでの6年間（2017年度から2022

年度）の年間面接回数の推移を表2に示した。またそれをグラフ化したものが図1である。

表2 面接回数の推移

内訳		年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
受理面接			63	86	101	25	53	66
個人面接	カウンセリング・親子相談		2,404	2,294	2,416	1,855	1,931	1,925
集団面接	フリースペース		40	23	70	58	1	56
心理検査			25	25	27	25	25	28
その他	コンサルテーション等		0	0	0	0	0	5
合 計			2,532	2,428	2,614	1,963	2,010	2,080

図1 面接回数の推移（グラフ）



2020年度は新型コロナウイルス感染拡大予防のため、心理検査と再来ケース以外は原則として新規面接申し込み受付を停止し、受理面接数が大幅に減少した。翌年度から申し込み受付を再開し、今年度は業務の多忙さから個人面接の申し込み受付を11月10日以降停止したものの、受理面接数は徐々に新型コロナ発生前の水準に戻りつつある。ただし、年間の個人面接回数は元の水準に戻っていない。その理由の1つとして、特任教員が担当するスーパーヴィジョン回数の増加が考えられる。2017年度から2019年度までのスーパーヴィジョン回数は次の通りである。2017年度702回（学内656回・学外46回）、2018年度658回（学内616回・学外42回）、2019年度1074回（学内1012回・学外62回）、2020

年度812回（学内765回・学外47回）、2021年度879回（学内798回・学外81回）。2019年度に公認心理師養成プログラムが始まって以来、スーパーヴィジョンの回数は年間約200回程増加した。この増加により、特任教員が担当できる個人面接数が減少している可能性がある。しかし、個人面接回数は、新型コロナ感染拡大前より約500回減少している。その理由については、ここ数年で新型コロナウイルスの感染予防のために申し込み受付の制限をしてきた影響が考えられる。集団面接回数は昨年度1回であったが、年度によって増減はあるものの今年度は56回と新型コロナ発生前の水準に回復している。心理検査回数（結果報告面接を含む）はすべて発達検査であり、新型コロナ感染拡大中でもほぼ横ばいの状況

であった。この数がキャパシティの限界を示しており、常に申し込みが上限まで集まっていることから、発達検査への需要の高さが伺える。

次に、面接形態によって分類された月別の面接回数を表3に示す。大学院修了生が卒業し、その引継ぎケースを新入生に担当してもらうまでの空白期間である4、5月、および夏季休暇にあたる8月には個人面接回数が多少減少している。しか

し、それ以外の月ではほぼ160回前後で推移している。受理面接については、11月10日に申し込み受付を停止して以降、大きく減少している。12月以降も僅かながら受理面接が実施されているのは、心理検査のための受理面接や以前に来所していた方など例外的なケースを受け入れたためである。

表3 2022 年度 面接形態及び月別面接回数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
受理面接	3	9	14	6	5	5	7	10	2	3	0	2	66
個人面接	143	133	172	163	136	163	174	156	177	164	169	175	1,925
集団面接	3	5	3	3	3	8	6	5	4	3	7	6	56
心理検査	3	3	2	4	1	2	2	1	3	2	2	3	28
コンサルテーション	1	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	5
合計	153	151	192	176	145	178	190	172	186	173	178	186	2,080

3 来談者

2022 年度の新規来談者の年齢別・性別の内訳を表4に示した。総じて、新規来談者数は多くはない。内訳を見てみると、2021 年度は珍しく小学生の申し込み数が大学生・成人を上回っていたが、2022 年度は従来通り、大学生・成人の申し込みが多く、全体の53%を占めている。特に成

人女性の相談が多く、全体の38%に達している。次に多いのは小学生の申し込みで、これも従来通りである。男女比は、成人女性の申し込み数が多かったため、かなり女性が多くなっている。なお、当センターでは成人年齢は従来通り19歳以上でカウントしている。

表4 2022 年度 年齢別・性別相談件数（新規）

※親子相談の場合、親子で1件とし、子どもの年齢でカウントする

性別／年齢	就学前	小学生	中学生	高校生	*大成前	大学生・成人	合 計
男	0	7	4	0	0	7	18
女	0	4	2	5	0	18	29
合 計	0	11	6	5	0	25	47

* 18歳以下の大学生もしくは所属なし

新規来談者の来談経路は表5の通りである。例年通り「他機関からの紹介」「学校からの紹介」「相談員を知っている」という経路が主であ

り、新型コロナ感染予防の観点から申し込みの受付を大幅に制限していた期間を経ても、地域における当センターへの信頼は変わっていないと言え

よう。他に 2022 年度の特徴としては、「ホームページ・電話帳で知って」来所した人が、「他機

関からの紹介」と並んで一番多かったことが挙げられる。

表 5 2022 年度 来所経路（新規）

相談経路	件数
他機関からの紹介	11
学校からの紹介	10
相談員を知っている	8
相談に来ている人からの紹介	0
ホームページ・電話帳で知って	11
知人から紹介	6
学内他部署からの紹介	1
その他	0
合 計	47

4 相談内容

新規来談者の相談内容いわゆる主訴について、18 歳以下の場合を表 6 に、19 歳以上の場合を表 7 に示した。

18 歳以下の主訴では、「発達のかたより」が 7 件と最も多く、近年この傾向が続いている。これは、発達障害に対する世間の関心の高さを反映していると考えられる。次いで「集団不適応」が 5

件となっている。

19 歳以上の主訴では、「自分の生き方」が 9 件と最も多くなっており、その次に「子どもの問題」「対人関係」が 5 件と多岐にわたる主訴がある。また、年齢層も 19 歳から 60 代までと幅広い範囲に及んでいる。今後も様々な相談内容に対応できるよう、地域で信頼される相談機関として研鑽を積み続けたいと考えている。

表 6 2022 年度 相談内容別件数 18 歳以下（新規）

主 訴／年 齢	就学前	小学生	中学生	高校生	*大成前	合 計
発達のおくれ	0	1	1	0	0	2
発達のかたより (高機能自閉症・アスペルガー・LD・ADHD 他)	0	4	3	0	0	7
不登校	0	0	2	1	0	3
集団不適応	0	3	0	2	0	5
非行・暴力	0	1	0	0	0	1
神経症的症状	0	2	0	1	0	3
その他	0	0	0	1	0	1
合 計	0	11	6	5	0	22

* 18 歳以下の大学生もしくは所属無し

表 7 2022 年度 相談内容別件数 19 歳以上（新規）

主 訴	件 数
子どもの問題（発達障害・不登校・問題行動・育て方など）	5
対人関係	5
家族関係	2
自分の生き方	9
神経症的症状	1
その他	3
合 計	25

Ⅲ スーパーヴィジョン

当センターでは、「研修員・研究員」制度を導入している。この制度では、センター長の承認を得て、本学大学院心理学研究科心理学専攻博士前期課程在籍者を「研修員」とし、博士後期課程在

籍者および修了生を「研究員」として定めている。研修員と研究員は当センターに在籍し、当センターでの臨床および研修活動に携わることができる。2022 年度の研修員・研究員の在籍者数は表 8 の通りである。

表 8 研修員・研究員在籍数

	人数
研修員	23 名
研究員	27 名
合計	50 名

研修員・研究員は、当センターで行う臨床活動について、原則として専任教員または特任教員から 1 セッションごとに 1 回（50 分程度）の個人スーパーヴィジョンを受けることとなっている。また、卒後教育の一環として、博士前期課程・後期課程修了生および研究員が当センター外で行っている臨床実践についても、希望者には有料で特任教員がスーパーヴィジョンを行っている。前者を「学内」、後者を「学外」とし、月別のスーパーヴィジョンの回数を表 9 に示した。スーパーヴィジョンの実施回数の近年の推移は前述した通りである。2017 年度には年間 700 回を超えてスタッフの業務量の上限に達したと思われるスーパーヴィジョン実施回数が、2019 年度には 1000 回を超え大幅な増加となった。この増加は、それま

で専門相談員 4 名による週延べ 11 日勤務体制であったのが、2019 年度から特任教員 4 名の週延べ 16 日勤務体制に変更されたことにより、人的資源が増加したことが要因と考えられる。また、新型コロナウイルス感染蔓延の影響と思われるが、2020 年度と 2021 年度にはスーパーヴィジョンの実施回数が 800 回台まで減少していた。しかし、2022 年度には 1000 回近くまで回復した。近年、学外スーパーヴィジョンの回数も増加しており、修了生達が心理臨床の専門家として成長する上で欠かせないスーパーヴィジョンの重要性を実感し、申し込んでいることは喜ばしいことと言えよう。

表 9 研修員、研究員、修了生に対するスーパーヴィジョン回数（1 回 50 分程度）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
学内	51	50	82	78	58	75	79	81	93	77	77	101	902
学外	8	6	8	7	7	6	7	5	5	4	4	5	72
合計	59	56	90	85	65	81	86	86	98	81	81	106	974

Ⅳ 年間事業報告

2022 年度に行われた事業を表 10 に示す。表の「センター事業関係」にはセンターの運営に関わる事業が掲載されており、「ケースカンファレンス・地域貢献関係」には各種ケースカンファレンスと地域への貢献に関する事業が記載されている。

2022 年度は新型コロナウイルス感染予防対策も一定程度緩和されたため、2020 年度および 2021 年度には遠隔会議システム（Zoom）を使用して開催されていたケースカンファレンスを、ほぼ対面での実施に戻した。ケース発表者や参加者の非言語的な表出も考慮しながら、発言内容や表現方法を配慮し、参加者全員で作り上げていくケースカンファレンスは、やはり対面の方が教育効果は高いと思われる。また、心理臨床自体が人と人の対面での活動が基本であり、その意味でも、対面でのケースカンファレンスの経験を持つことは望ましいと言えよう。ただし、未だ新型コロナウイルス感染の危険が完全に解消された訳ではないため、通常のケースカンファレンスはすべて、4 つの小グループに分けて少人数で行い、換気を確保しながら計 14 回実施した。また、通常のケースカンファレンスに加えて、外部講師を招いての特別合同ケースカンファレンスを 3 回実施した。

年度初頭には、博士前期課程の新入生が当センターで臨床活動を始める前に、「心理相談センターガイダンス」と「臨床オリエンテーション」（3 回）を Zoom で開催した。「心理相談センターガイダンス」では、心理臨床に携わる者としての態度や

マナーについての理解を深め、「臨床オリエンテーション」では、治療構造、守秘義務、治療契約など心理療法の基礎となる重要な約束事の意味を学ぶことを目的としている。いずれもグループディスカッションを活用し、他者の意見から学びながら自分自身で考えることができるように工夫した。9 月と 10 月には「秋の臨床オリエンテーション」も各 1 回開催した。研修員を指導する中で、知的な理解はあっても臨床現場で自分の感覚や感情を適切に活かせずに困惑する状況が多く見られたため、新型コロナウイルス感染拡大中は中止していたリフレクティブトレーニングを臨床感覚を豊かにする目的で 9 月に行った。また 10 月の「秋の臨床オリエンテーション」では、心理療法で困難な場面（クライエントの沈黙やアドバイス要求など）にどう対応するかをロールプレイで実践する新しい取り組みを導入した。リフレクティブトレーニングやロールプレイは Zoom での実施は困難であるが、2022 年秋には新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていたので、こうした体験型のトレーニングを対面で開催することができた。

当センターは、地域に向けた公開講演会を開催しており、2022 年度は奈良大学教授井村修先生をお招きして「こころの時代—今、心理専門職に求められるものは—」というテーマでお話いただいた。公認心理師の資格制度誕生の歴史も含めて、現代日本で心理専門職に期待されることについてご講演いただき、オンサイトとオンライン（Zoom）で多くの地域の方々が参加された。

また、当センターの趣旨や活動を地域に知って

もらうことを目指して、「センター便り」をホームページに季刊で掲載している。

表 10 心理相談センター 2022 年度年間事業・活動報告

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
4 月	第 1 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 1 回研修員会議 (Zoom) センターガイダンス (Zoom) 臨床オリエンテーション① 臨床オリエンテーション②	センター便り第 18 号発行
5 月	第 2 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 2 回研修員会議 (Zoom) 臨床オリエンテーション③	第 1 回グループケースカンファレンス
6 月	第 3 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 3 回研修員会議 運営委員会 (メール開催)	第 2 回グループケースカンファレンス 第 3 回グループケースカンファレンス
7 月	第 4 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 4 回研修員会議 玩具類下見・発注	第 4 回グループケースカンファレンス 特別合同ケースカンファレンス (湯野貴子先生・Zoom) 第 5 回グループケースカンファレンス
8 月	センター大掃除	
9 月	第 5 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 5 回研修員会議 秋の臨床オリエンテーション①	特別合同ケースカンファレンス (平野直己先生) センター便り第 19 号発行
10 月	第 6 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 6 回研修員会議 運営委員会 (メール開催) 秋の臨床オリエンテーション②	第 6 回グループケースカンファレンス 第 7 回グループケースカンファレンス
11 月	第 7 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 7 回研修員会議	公開講演会 (井村修先生・Zoom の併用) 第 8 回グループケースカンファレンス 第 9 回グループケースカンファレンス
12 月	第 8 回センター会議 (Zoom と Teams) おもちゃの現地研修 (第 8 回研修員会議中止)	特別合同ケースカンファレンス (乾吉佑先生・Zoom) 第 10 回グループケースカンファレンス
1 月	第 9 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 9 回研修員会議 玩具類下見・発注	第 11 回グループケースカンファレンス 第 12 回グループケースカンファレンス
2 月	第 10 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 10 回研修員会議	第 13 回グループケースカンファレンス 第 14 回グループケースカンファレンス

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
3 月	第 11 回センター会議 (Zoom と Teams) 第 11 回研修員会議 センター大掃除 運営委員会 (Zoom 開催)	FD 研修会 (竹内康二先生・Zoom と Teams)
年間	センター会議 11 回 研修員会議 10 回 おもちゃの現地研修 1 回 運営委員会 3 回 センターガイダンス 1 回 臨床オリエンテーション 5 回 研究紀要 No16 発行 1 回 玩具類下見・発注 2 回 センター大掃除 2 回	グループケースカンファレンス 14 回 特別合同ケースカンファレンス 3 回 公開講演会 1 回 センター便り発行 2 回 FD 研修会 1 回

Ⅵ おわりに

当センターは、設立から 21 年目を迎えた。この間、臨床活動や教育活動において様々な変化や課題に直面したが、それらを乗り越えてきた。特に、2019 年度から公認心理師の養成カリキュラムを開始し、2020 年度からは新型コロナウイルス感染予防のために対面での相談や研修を制限せざるを得なくなった。しかし、当センターはそのような困難な状況の中でも、地域社会や大学院生に対して質の高いサービスを提供することを目指して努力してきた。

2022 年度も新型コロナウイルス感染拡大の危険は依然として続いたが、当センターは感染症対策を徹底しながら対面での相談活動を継続した。当センターではオンラインでの相談の導入についても検討は行ったが、初学者である大学院生に心理療法の基本を学んで欲しいとの思いから、オンラインの相談面接は行わず、プレイセラピーは使用した玩具の消毒のために時間を 50 分から 40 分に短縮し、また混雑を避けるために大学院生の実習に必要最低限のレベルに達した時点で新規申し込み受付を停止し、対面での面接を続けてきた。

オンラインでの面接は時間や場所の制約を受け

ることが少なく便利であるが、対面での面接と比較して効果が劣る可能性もあることは念頭に置かなければならない。例えば、BMC Psychology というジャーナルで発表された研究では、新型コロナウイルス感染拡大前後に大学生を対象に行った対面とオンラインの心理療法（精神分析的カウンセリング）の効果を比較した結果、対面とオンラインいずれも心理的苦痛を減らす効果があった一方、生活満足度を高める効果は対面にしか見られなかったと報告されている。このようなデータからも分かるように、オンラインでの相談が対面での相談と同じような効果を得られるとは限らないことを意識しなければならない。心理療法の研修においても同じようなことが言えると考えられる。大学院生の研修に関しては、感染対策の一環としてオンライン研修を導入しながら継続してきたが、オンライン研修は、オンライン面接と同様に時間や場所の制約が少なく、遠方の講師を招聘しやすいという利点があるものの、やはりそぎ落とされてしまう効果があるのではないかと感じている。それは、対面での研修はオンライン研修と比べて、より多くの情報や感情を伝えることができるという利点があることと関係しているのではな

いかと考える。

2022 年度の後半から社会全体でも日常の活動を徐々に回復していこうという流れになったため、これまで制限していた対面での研修も積極的に取り入れていった。対面での研修を制限する必要が無くなった今、オンライン研修の利点も取り入れつつ対面での研修とのバランスを見直すことが必要だと考える。

公認心理師養成カリキュラムが開始されて間もなく新型コロナウイルスの感染拡大が始まったため、この数年は落ち着いて研修の在り方とその効果について吟味することができなかった。しかし、今後は対面での相談や研修を制限する必要が無くなり、研修の在り方も幅を広げていける中で、臨床心理士、公認心理師にどのような資質が求められているのか、そしてそれに応えるにはどのような研修が適切であるのかを模索していきたいと思う。当センターは、地域社会や大学院生に対して質の高いサービスを提供することを目指しながら、心理臨床の発展に貢献していきたいと願っている。

引用参考文献

Karakasidou, E., Pezirkianidis, C., Galanakis, M., & Stalikas, A. (2022).

Effectiveness of an online versus face-to-face psychodynamic counselling intervention for university students before and during the COVID-19 period. *BMC Psychology*, 10(1), 1-14. <https://doi.org/10.1186/s40359-022-00742-7>